

伝統を力に変え  
秋田に新風を



左から現社長の武藤元さんと専務取締役の武藤元貴さん。



木型や粘土での型づくりはすべて手作業で行っている。



クラウドファンディングに挑戦したホットサンドメーカー。



熟練の職人が行っている、金属を流し込むための砂型を作る作業。

2015年に秋田に戻り、家業に入った武藤さん。現在は、父、祖父の代からの熟練職人や母、弟を含む4名の少数精鋭でものづくりに邁進している。現場に入って改めて感じたのは、何もないところから形を生み出し、困りごとに応える鑄物の奥深さだった。かつて遊び場だった工房で、職人たちの背中にかっこよさを感じた幼少期の記憶と、東京で得た視点が重なり、武藤さんの決意は確固たるものとなった。

発展的な事業承継で秋田を盛り上げたい

自身の転機となったのは、秋田県の若者活躍プラットフォームへの参加だった。そこで家業の価値を認められたことが自信となり、オーダーメイドのホットサンドメーカー開発に繋がった。「家業の経営資源を活用し、新しい挑戦で10年後の柱を作る」というベンチャー型事業承継の考え方に触れた武藤さんは、全国の跡継ぎ仲間と切磋琢磨するオンラインコミュニティにも飛び込んだ。その刺激を地元にも還元したいと、2023年には仲間とともに「秋田アトツギ会」を発足させた。

現在、会には18名が所属。跡継ぎ特有の孤独や、ファミリービジネスゆえの共通課題を1人で抱え込まず、次の挑戦へ繋げるための受け皿だ。秋田の独特な企業文化を持つ跡継ぎが新しい挑戦をすれば、秋田はもっと面白くなると武藤さんは確信している。今年度には事業承継を控え、新たな取組も設計中だ。先代たちがその時代のニーズに寄り添ってきたように、武藤さんもまた、地域に必要とされる新たなものづくりの形を模索し続ける。

有限会社 武藤工芸鑄物

〒010-0822  
秋田市添川字境内川原228-5  
TEL 018-832-5329  
FAX 018-832-5728  
<https://muto-casting.com>

専務取締役  
武藤 元貴 (むとう げんき)



HP



鑄物の技で「一点もの」に命を吹き込む

秋田市添川にある有限会社武藤工芸鑄物。創業は明治中期ごろと推定され、専務取締役である武藤元貴さんは6代目となる。鑄物店はかつて『かまっこや』と呼ばれ、親しまれていたという。生活に欠かせない鍋などの補修を行う、多くの人にとって身近な存在だった。

ひと言で鑄物といってもさまざまなものがある。例えば、大きな工場で造られる自動車のエンジンや部品なども鑄物だ。同社では橋やトンネルに掲げる銘板を主に製造しており、その他には銅像といった大きいものから、焼印

や学校の卒業記念に配られるような文鎮などの小さいものまで製造している。木や粘土など様々な材料で原型を自社製作し、一点ものを作るのが得意だという同社。機械化が進む現代において、手仕事で多様なオーダーに応える鑄造所は、県内はもとより、全国でも希少だ。

「ただ鑄物売るのではなく、代々その時代の困りごとに技で応えてきた。それが当社の本質です」。

代々、どんな仕事をしてきたのか。歴史を紐解き、武藤さんは自社の理念を再確認している。

外を知り、再認識した「家業の希少価値」

大学進学を機に秋田を離れた武藤さんは、東京のイベント会社に勤めていた。当時は、家業への想いはあったものの、斜陽産業と言われる鑄物業に将来性を感じられないことから「好きなことをやれ」という父の助言もあり、家業を継ぐ意思は薄かったという。しかし、東京で多くの人と対話する中で、秋田で代々続く「手仕事」や「一点もの」という存在が、いかに貴重で価値あるものかを痛感する。「外の環境を知ること、自分たちの強みがようやく客観的に見えた」と武藤さんは振り返る。



同社では銅合金、アルミニウム、鉄を使う。それらを溶かす黒鉛坩堝。



手づくりした型に溶かした金属を流し込む作業は繊細な作業だ。



秋田アトツギ会のメンバーとは、活発な意見交換を行っている。